明治の国際人
浅田栄次と徳山

会員　小川　宣

写真１　浅田栄次肖像画（シカゴ大学所蔵）

浅田栄次は一八六五（慶応元）年に徳山で生まれ、一八八八（明治二一）年三月神学への志を立てて当時の帝国大学（現東京大学）を中退して、アメリカのガレット神学校（ノースウエスタン大学構内）に留学した。同校卒業後コロンビア大学大学院を経てシカゴ大学大学院に入学した。同大学院を卒業と同時に同大学院最初の博士号を受けた。一八九三（明治二六）年七月帰国後は、青山学院神学部教授から創設期の東京外国語学校教務主任（教頭役）となり外語発展の基礎をつくった。また英語科主任教授を務めたが、一九一四（大正三）年一一月、四九才で没した。

その間、文官高等試験委員・文部省視学委員等を歴任し「文部省英語読本」を刊行し、一貫して英語教育の発展に尽力した功績は計りしれないものがある。

栄次とほぼ同時代に帝国大学で学んだ者の中に新渡戸稲造や夏目漱石がいる。一方郷土出身の英学者石田憲次・岩

崎民平は栄次の教え子である。

　昨年来、筆者の同僚河口昭先生から浅田栄次のことを耳にするようになり、何かと気をつけていると、私の祖父小川清次の明治一九年の「備忘記」に、浅田栄次のことが記されてあり、祖父と栄次のつながりの一端を知ることができた。

　その後、別な用件で短冊を整理している時に栄次の短冊のあるのを見出した。二枚とも私の曽祖父官介の金婚式のお祝いに寄せられたもので、家族ぐるみの交流のあったことがうかがえてうれしかった。

　一方、祖父の整理した写真帖に、一諸に写った栄次の写真もあり、より親近感を覚えた。特に栄次は渡米する前に徳山に帰り、両親や友人との送別会を催したようで、明治二一年三月六日に久野写真館で写ったのがより興味を引いた。

　次に浅田栄次と徳山とのかかわりあいを記す資料を紹介してみよう。栄次が少年期を徳山で過ごしたことは、友人の小川清次と履歴書を同じくしていることでわかる。それによると、

　明治三年（一八七〇）　興譲館（徳山藩校）

　明治八年（一八七五）　徳山村桜馬場小学校助導

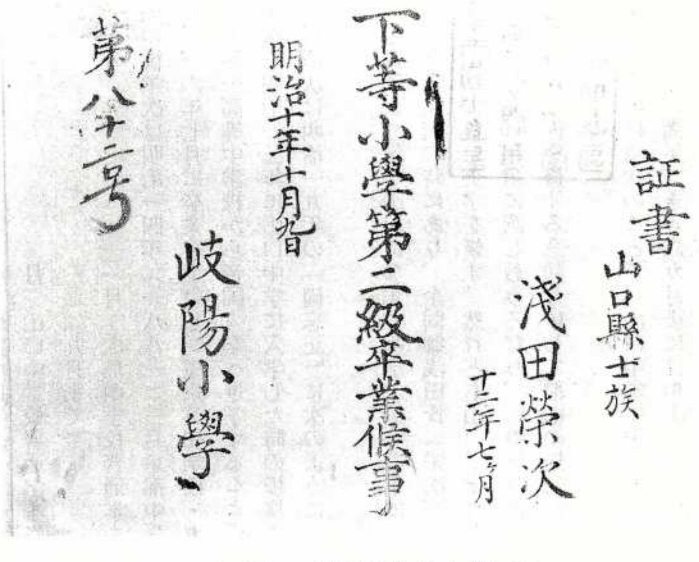
証書
山口縣士族
浅田榮次
十二年七ヶ月
下等小學第二級卒業候事
明治十年十月廿日
岐陽小學
第八十二号

写真２　桜馬場小学卒業証書

明治一〇年（一八七七）　徳山村岐陽小学校卒業
明治一一年（一八七八）　小学校教員奉職

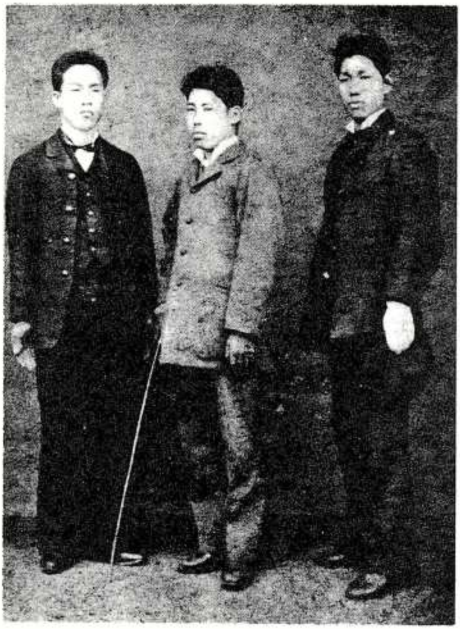

写真3　徳山における送別会の時
（久野写真館にて）
中央　浅田栄次　右　小川清次

明治一三年（一八八〇）一月　依願免職
〃　　　二月　山口中学校普通学を修む
（九月まで）
〃　　　一一月　広島中学校普通学を修む

その後栄次は明治一四年（一八八一）三月京都中学に入学し、一六年七月に卒業後上京し、東京英和学校・工部大学校・第一高等中学校から帝国大学へ進学することになる。

栄次が明治一三年に山口中学に入学した時の模様について小川清次は明治一九年の「備忘記」に次のように記している。

「余弱年より学を山口になす。明治十三年の事にして、処々英学盛起の時にあり、余同郷浅田氏（栄次）と共に笈を山口に負い英学を修す。然れども山口中学たるや本偏則にして、和語に訳し教うるなり、余慨歎常に止むなし、終に正則を修する念頻りにして偏則の無効顕に（以下余白）」

余というのは清次のことで、山口中学に栄次と共に入学したけれど、満足できず六カ月後には相次いで広島中学に転校することになる。これらのことについては「浅田栄次追懐録」に詳しく記されている。

栄次は明治二一年春渡米することが決定したので、三月

四日に徳山に帰郷した。まず郷里にいる両親と一族、親友に別れを告げた。

三月六日の午後四時に栄次の最も親しい友人達が久野伝槌方に集い記念写真を撮った。この写真は今も私の家に保存されている。八日の午後六時から新町の藤原楼で送別の宴が開かれ、翌午前一時まで歓談したという。

九日午後三時半から徳山町字幸町の劇場でキリスト教の大意（第一神・第二罪・第三救い）という演題で三時間にわたる大演説をした。この日はあいにく雨であったが聴衆は千二百名を越える盛況で、当時田舎としては珍らしいことであった。

九日の夜は赤松照幢氏の主唱によって、栄次・清次の外入江石泉（徳山藩士で正義派に属す。維新後は文墨を友とす。明治二九年没、七二才）・浅見津・村井文太・宝城行仁・赤松照幢（徳山徳応寺住職、妻安子とともに私立徳山女学校を創立。大正一〇年没、六〇才）の諸氏が徳応寺で深更まで快談に耽った。

一〇日には栄次の宅で親戚・友人が集まって別宴を開き、翌一一日午前六時に第二徳山丸に乗込み下関に向う。これは下関にいる第百十銀行の取締役をしている栄次の叔父野田祐を訪ねるためである。野田祐は、栄次の修学の費用や渡米についても大いに賛助し、その費用を出してくれた人である。因みに小川清次の妹多賀が野田祐の養女になっている。

栄次は下関から汽船で東上し、同月二七日横浜から「パーシア」号で渡米した。

栄次が渡米するまでの経歴及び故郷を懐かしみ両親・友人を思う心を伝え、日本を離れるにあたっての心境を吐露したのが「臨別書」である。この「臨別書」は三月一一日徳山を離れる時に記したものである。

「余は紀元一八六五年六月一一日（陽暦）を以て防州花岡外祖父上原勘兵衛の家に生まれ、七日にして名なし。祖父徳山老侯に請うて栄次の名を受く。生まれて微弱虚才あり。郷人に称讃せられ心竊に愧づ。幼にして興譲館に入り経史（経書と歴史）の素読を学ぶ。後其の化して桜馬場小学となるに及び始めて普通学を修め一八七五年三月に於て撰ばれて助導となり更に岐陽学舎に入り少しく高尚なる科学を修む。然れども性質粗暴なるが故に職を剥がれ再び小学生徒となる。遂に卒業して又授業生となり岐陽小学に出入す。

此際詩文を学び数理を究め漸く自己の学識に安んじ郷村に誇るの色あり。一八八〇年二月始めて洋学の修めざ

余ハ紀元千八百六十五年六月十一日ヲ以テ防州花岡外祖父
上原勘兵衛ノ家ニ生レ七日ニシテ名ナシ祖父慶山先僕ニ請
フテ榮次ノ名ヲ受ク生レテ微弱虚オアリ郷人ニ称讃セラレ
心竊ニ愧ヅ幼ニシテ興譲館ニ入リ経史ノ素読ヲ学フ
後其ノ化シテ櫻馬場小學トナルニ及ビ始メテ普通学ヲ
脩メ千八百七十五年三月ニ於テ撰レテ助導トナリ更ニ談陽
學舎ニ入リ以テ高尚ナル科学ヲ脩ム然レモ性質躁暴
ナルカ故ニ職ヲ剥カレ再ビ小學生徒トナル遂ニ卒業シテ
復タ授業生トナリ岐陽小學ニ出入ス此際詩文ヲ学ビ
數理ヲ究メ漸ク自己ノ學識ニ安ニシ郷村ニ誇ル也リ
千八百八十年二月始メテ洋学ヲ脩ムベキヲ知リ志ヲ決
シテ山中学校ニ入リ英学漢学數学ヲ脩ム居ルヿ五ケ月
去テ廣嶋中学校ニ轉シ到ル處誤テ勉強家ノ名ヲ
得随テ自ラ高フスルノ心アリ余カ性演説討論ヲ好ミ
自カラ議論家ヲ以テ居ル此歳十一月教頭大山某ヲ
逐フノ議起リ生徒總代數名ヲ撰テ之ヲ校長ニ請ヒ
抗辯屈セス余ハ遂ニ退校ヲ命セラル父母余ニ帰ヲ勧
ム余聴カスシテ京都ニ往キ市上ニ彷徨ス是レ余カ父母
ノ命ニ逆フノ始ニシテ又タ辛酸ヲ嘗ムルノ始メナリ後父母ノ
厳命ヲ受ケ親戚ノ戒諭ヲ聞キ志ヲ挫キ郷ニ帰リ復タ

英書ヲ見ル時ニ千八百八十一年一月ナリ七十餘日ヲ過キテ
叔父野田　祐　余ニ遊学ヲ勧メ余カ為メニ金銭ヲ協メ
ントス余跳テ京都ニ至リ京都中学ニ入リ脩學三年
中學ノ課程ヲ卒ヘ東京ニ向ハントス父母ノ聴カサルヲ
恐レ告ケスシテ東遊ス東京ニ入リ危険ヲ冒シ辛酸ヲ嘗
メ終ニ千八百八十四年四月工部大學校ニ入リ試テ官費
生ニ撰レ自負ノ心熾ナリ在學中基督教ヲ信シ
學識随テ進ミ教理随テ明ナルヲ覚フ然レモ信仰甚薄シ
千八百八十六年三月學制改革ノ際東京大學理科専門ニ
轉属シ十ケ月ニシテ帝國理科大學ニ入リ數學ヲ専
脩ス工部大學校ヲ出テシヨリ脩学ノ志モ資金ノ道ナ
ク遂ニ米国宣教師ノ譯官トナリ纔ニ学資ヲ求ム或ハ
書ヲ譯シテ之ヲ賣リ或ハ學舎ニ行テ人ヲ教ヘ困難頗ル
大ナリ千八百八十八年一月突然洋行ノ志ヲ発シ親戚
朋友ノ扶助ヲ得ヲ米國ニユーヨークニ遊ハントシ郷ニ帰
テ別ヲ父母兄弟親戚朋友ニ告ク在米三年ヲ期スト雖
モ明日ノ事余之ヲ知ラス今去テ異境ニ向フ再ヒ帰テ
岐山ヲ仰キ鼓海ニ臨ムハ果シテ何ノ日ナラン生命ハ人
ノ與カル所ニアラサルナリ

千八百八十八年三月十一日臨別書

浅田榮次

写真4・5　臨別書

るべからざるを知り、志を決して山口中学校に入り英学・漢学・数学を修む。いること五カ月、去て広島中学校に転じ、到る処誤りて勉強家の名を得、従って自ら高うするの心あり。余が性演説討論を好み自ら議論家をもっている。この年十一月教頭大山某を遂うの議起り、生徒総代数名を選んでこれを校長に請い抗弁屈せず余遂に退校を命ぜらる。父母余に帰を勧む。余聴かずして京都に行き市上を彷徨す。これ余が父母の命に逆うの始にして又辛酸を嘗むるの始なり。後父母の厳命を受け親戚の戒諭を聞き志を挫き郷に帰り又英書を見ず。時に一八八一年一月なり。七十余日を過ぎて叔父野田祐、余に遊学を勧め余が為に金銭を抛（ほう）たんとす。余跳て京都に至り、京都中学に入り修学三年中学の課程を卒へ東京に向わんとす。父母の聴かざるを恐れ告げずして東遊す。

東京に入り危険を冒し辛酸を嘗め終に一八八四年四月工部大学校に入り、誤て官費生に選ばれ自負の心愈々熾（さかん）なり。在学中基督教を信じ学識随て進み教理随て明なるを覚ゆ。然れども信仰甚薄し。

一八八六年三月学制改革の際東京大学予備門に転属し、十五カ月にして帝国理科大学に入り数学を専修す。工部大学校を出でしより修学の志あれども資金の道なし。遂に米国宣教師の訳官となり纔（わずか）に学資を求む。或は書を訳してこれを売り、或は学舎に行きて人を教え困難頗る大なり。一八八八年一月突然洋行の志を発し親戚朋友の扶助を得て米国ニューヨークに遊ばんとし郷に帰りて別れを父母兄弟親戚朋友に告ぐ。在米三年を期すと雖も明日の事余これを知らず。今去て異境に向う再び帰りて岐山を仰ぎ鼓海に臨むは果して何れの日ならん。生命は人の与かる所にあらざるなり。一八八八年三月十一日　浅田栄次」

さらに栄次が山口中学校にいた頃の模様について小川清次は次のように述懐している。

「…当時徳山人にして山口中学校に在りし者は粟屋登吉君・池田竜作君及び同時に入学せし君との四人にして、粟屋君は間もなく東京に行く。やがて余は池田君と共に君のいる広島中学に転校した。その君は京都中学校へ、余は東京へ赴き東西に別れたが、まもなく君は東京へ来られた。…山口時代、三・四日間の休課が俄かに出来たので君と余と今一人（池田君であったと思う）が急に帰郷を思い立った。併し時は既に土曜日の午後で其日の中に徳山迄辿り着くは頗ぶる困難なことであった。彼是六・七里も来りし頃には日は既に西山に没して、やや疲労と飢とを感じてきた。椿

が峠にかかりし時は、日は全く没して月もなき闇夜で、飢と疲れは刻々に迫ってきた。夜市の川土手の餅屋で一同蘇生の思いをなし、それより勇気を得て尚一里計りを辿って福川に着いた頃は三人共綿の如くなりて最早一歩も進み得ぬので、ここに一泊する事とし、宿料不足の時は翌朝一名宅迄取りに行く事として旅宿中屋与平なる者の家を叩きて一泊する事となった。宿泊料は幸に事なく済ましたが蟇口には各二・三銭宛を余すのみで、又空腹を抱えて二里余りの途を辿り、辛うじて帰宅することを得た。徳山の西端の江口という所に其頃田舎名物饅頭というのがあった。帰途各自懐中の底を叩いて此を家苞にした。右は君と会して、談たまたま旧時の事に及ぶと必ず先づ話題に上った所謂一つ話である。」

郷土徳山の生んだ明治の国際人といえる浅田栄次資料展が昨年六月三〇日から一〇日間の日程で開催された。これを機に浅田栄次の資料を徳山に保存し、栄次とかかわりのあるアメリカのシカゴを中心とした地域と交流することが、今日の国際化の時代に相応しいことであり、栄次の意志を生かすことになるのではないかと思う。

大島一周探訪会　浄西寺にて（P.84参照）